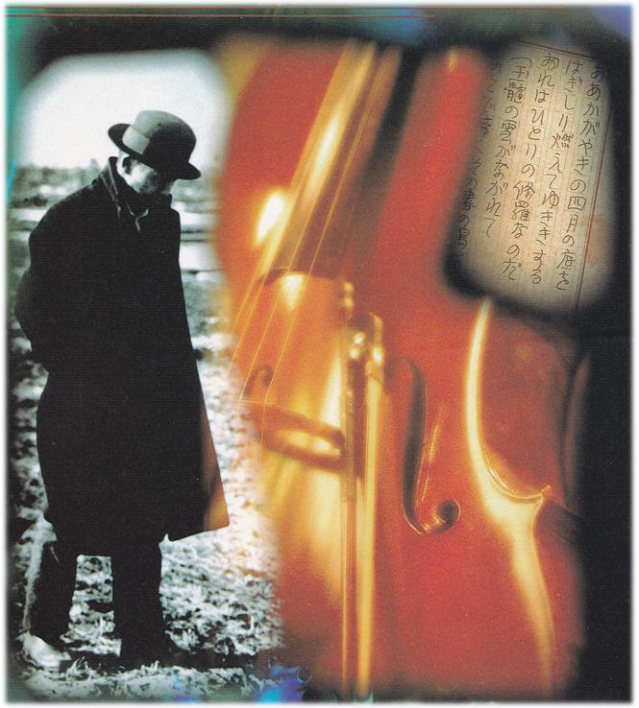
宮沢賢治と音楽

―「セロ弾きのゴーシュ」を通して



ぷろろーぐ
学生たちとの思い出
第1章
単なる成功物語なのか？
第2章
賢治と音楽と

ぷろろーぐ

学生たちとの思い出

１９９０年　クリスマス会

学生たちとのオペラの思い出

学生の演じた『シグナルとシグナレス』

◉今から30年ほど前、私が所属していた家政学部児童学科の学生たちを中心に、オペラ劇「シグナルとシグナレス」が公演された。

◉発案者は私であったが、指導されたのは児童学科の教員でありながら、劇団バナナンシアターを主宰し、自ら宮沢賢治の作品をオペラ化して演じる中川保子さん。

※このとき学生たちが演じたのは「シグナルとシグナレス」だったが、中川さんは前々から「セロ弾きのゴーシュ」を指導したいといっていた。しかし、その思いはかなわなかった。

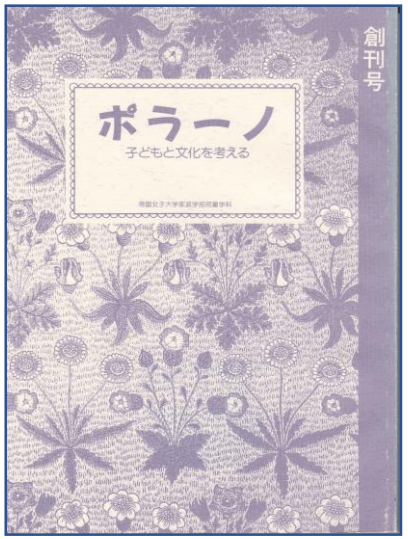
◉大学で声楽を学んだあと演劇学校に通い、関西二期会のオペラに出演、また芸術祭賞受賞のオペラシアターこんにゃく座の研修所を修了し、その公演にも参加した。

◉第1回大阪ヴォーカル(声楽)アンサンブル・コンテスト第1位金賞受賞。

2011年、逝去。

中川保子(なかがわやすこ)

大阪教育大学特設音楽過程声楽科卒業。1987年9月にこんにゃく座公演の「白墨の輪」に出演ののち、同研修所に通い終了公演では「セロ弾きのゴーシュ」に出演。



「ポラーノ」は児童文化に関する研究誌。
教員の論文だけでなく、学生たちの卒論やレポートなども掲載した。

▼宮沢賢治インタヴューシリーズ①

賢治オペラを演じて

中川保子氏に聞く

□聞き手□松田司郎

劇団バナナンシアターを主宰しながら宮沢賢治の作品をオペラ化して演じる中川保子さんを初冬の11月28日（火）私の研究室に招いて約一時間談笑した。

学生の演じた『シグナルとシグナレス』

・林光を通して賢治との出会い

松田　来年の三月頃に、私の研究室と竹内研究室の合同で『ポラーノ』という題名で研究誌を出します。

主旨の一つは、子どもと文化に関する研究の発表、一つは研究とは何ぞやを学生に知ってもらう目的です。卒業論文というものが具体的にあるんですけれども、卒論とは何ぞや、どんなテーマがあってどんな書き方があるかを知って欲しいというのがねらいです。

本番見たら出来が良かった

松田　7月に児童学科の学生を中心にあなたの大変な演出指導で、ぼくは前日に見せてもらって大丈夫かなあって思ったんだけれど、本番見たらびっくりするほど出来が良かった。

中川　よく頑張ったなあと思います。

松田　学生は声楽をやっているわけじゃないでしょう。

中川　賢治のコトバは、声とか人とかを選ばないっていうか、その人がその役に入りきって、たとえば「ラ」の音がかすれても、そんなことで表現がダメになってしまうようなものではないと思います、マネでない自分の言葉で語ればちゃんと表現として成立します。

松田　ぼくはほんとに心配したけど、ところが本番で歌っているうちに度胸がすわったのか、ある種の心地よい熱っぽさを感じたからね。

中川　えェ、そうだと思います。集中したらやっぱり力が三倍にも四倍にもなるんでしょうね、きっと普段できないことができたりする。

カッコウにだけあやまる

松田　ゼミ生が「セロ弾きのゴーシュ」を卒論でやっている。あれネコ、カッコウ、タヌキの子、ネズミの親子って出てきて、タヌキ、ネズミってただんだん優しくなっていくのね。

中川　えェェェ・・・。

松田　それで最後にカッコウにだけ謝る、「あの時はごめんね」なんて、猫にはあやまらない。それはなぜかっていうのを今やってるの。

中川　そう、ネコにはあやまらない、ネコ一番ひどい、さんざん踊らせておいて、舌を見てやろうといって舌を出さしておいて、マッチを擦ったりする・・・。

松田　そう、「インドの虎狩」で踊らせておいて、なのにあやまらない。

中川　カッコウにあやまるのはなぜかっていう気持ち、わかりますよ。私はカッコウの場のゴーシュをやったんですけど、一番痛いところをカッコウがグサッと言うんです。「なぜやめたんですか。ぼくらなら、どんな意気地のないやつでも咽喉から血が出るほど叫ぶんですよ」って。もうちょっとでできるのにって。

松田　そう、そう・・・。

ゴーシュはだんだん変わってくる

中川　一番痛いところを突かれるから、カッとして怒る。「むしって食ってしまうぞ」って。けど実はゴーシュは、その時に一番感じるものがあるんです。涙をこらえているんです。私、やってみてそう思いました。自分で自分に怒っている。

松田　うんうん・・・。

中川　あの場泣かせますよ。ゴーシュの後ろ姿の肩は、きっとふるえてたと思う・・・。

松田　そうそう・・・。

中川　カッコウに出会ったのをきっかけに、ゴーシュはだんだん変わってくる。心を開いてくるんですね。ネコのときはゴーシュはネコを馬鹿にしている。次のタヌキの子のときは一緒に合奏するのを楽しんでいる。

松田　うんうん・・・。

中川　「糸が合わない」という指摘にも素直に「いやそうかもしれない」なんて言いますよね。

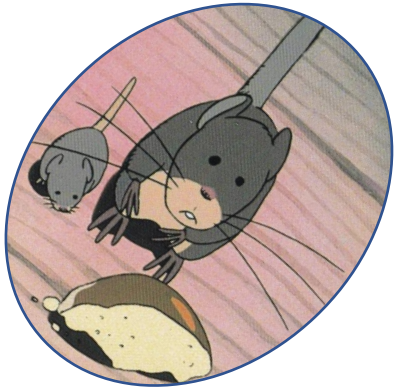
松田　そうそうそう・・・。

中川　で、次のネズミの母子なんかには、頼まれてないのにパンをやったりなんかする・・・。

このインタヴューは
「宮沢賢治インタヴュー
シリーズ」の
第一回目として、
１９８９年秋に
私の研究室で
行われました。
約一時間の談笑でした。
インタヴューは
まだまだ続きますが、
割愛させていただきます。

第1章

単なる成功物語なのか？



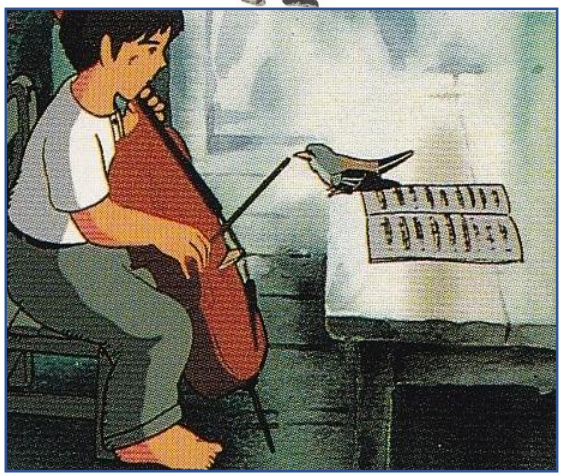
物語のあらすじ

◉町の活動写真館の金星音楽団でセロを弾くゴーシュは、あまり上手でないためにいつも楽長にどなられている。

◉金星音楽団は、無声映画時代に活動写真の弁士にあわせて伴奏する楽団である。

◉「第六交響曲」の演奏会まであと十日。ゴーシュは町はずれにある水車小屋の家に帰ってくると、毎夜必死に練習にはげむ。

◉そこに最初の夜、「トロイメライ」をリクエストする三毛猫、次の夜、音階を習いにくるカッコウ、持参のスティックで「愉快な馬車屋」を合奏するタヌキの子、セロの音で子どもの病気を治しにくるネズミの母子と、入れかわりにさまざまな来客が訪ねてくる。



◉彼らとの対話から自分の演奏の欠点を自覚させられたゴーシュは、自分の中の何かが目覚めたように思う。

◉十日後の演奏会で、楽長からアンコールを所望されて、三毛猫に聴かせた「印度の虎狩」を弾く。すると会場がしずまり、ゴーシュは楽長や仲間から賞賛をあびる。

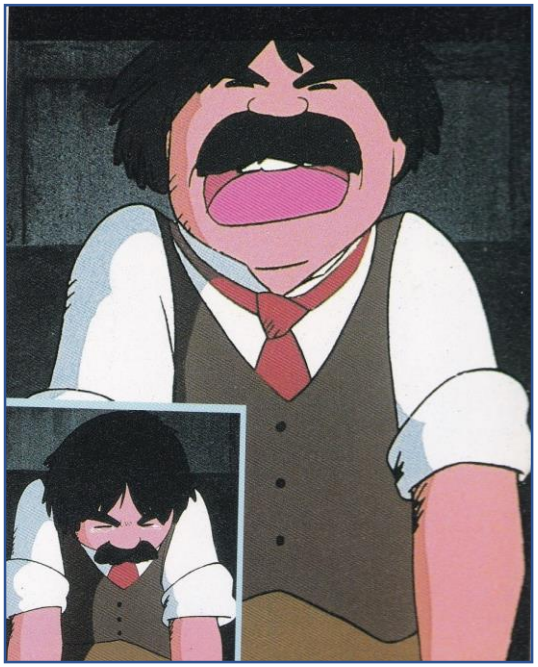
物語の主題は何か？

「セロ弾きのゴーシュ」は、賢治作品の中でも人気の高い作品です。

さて、この作品は、《下手なセロ弾きが努力のすえに上手くなる》という、単なる成功物語なのでしょうか？

ゴーシュのセロ弾きの欠陥

「おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたっと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。」



◉ゴーシュは楽団では「いちばん下手」で「いつも楽長にいぢめられている」存在と書かれている。

◉楽長からの指摘は①表情や感情が出ない、②リズムが悪い、③音程が悪い、という3点だ。

帰宅して猛練習に励む

◉ゴーシュの独りよがりは、彼の意識の中ではただセロをもって水車小屋の自宅に帰り、やみくもにくり返し「ごうごうごうごう」弾きつづければ上達すると頑固に信じ込んでいるところだ。

ゴーシュはいきなり棚からコップをとってバケツの水をごくごくのみました。それから顔を一つふって椅子へかけるとまるで虎みたいな勢いでひるの譜を弾きはじめました。

楽譜をめくりながら弾いては考え考えては弾き、一生けん命しまいまで行くと、またはじめからなんべんもなんべんも、ごうごうごうごう弾きつづけました。

動物たちの訪問①三毛猫

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライを弾いてごらんなさい。きいてあげますから。」
「生意気なことをいうな。ねこのくせに。」
セロ弾きはしゃくにさわって、このねこのやつどうしてくれようと、しばらく考えました。

●ゴーシュは、昼間に楽長に叱られたことからくるムシャクシャした感情から、「生意気だ」と怒鳴る。
●そして猫を脅かすために「インドの虎狩」の曲を弾く。
●猫は火花をだして苦しみ、ゴーシュのまわりを走りつづける。

動物たちの訪問②かっこう

◉ゴーシュは初めのうち鳥ごときに音楽が分かってたまるかという気持ちから「このばか鳥め」とののしるが、内心では「鳥の方が本当のドレミファにはまっている」と思い出す。

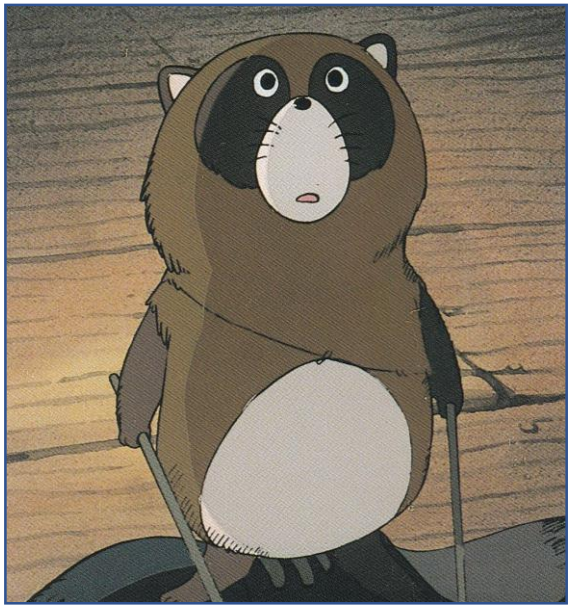
◉だから、ゴーシュはかっこうが帰るために窓ガラスに頭をぶつけたとき、窓を破って出してやる。

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」「うるさいなあ。そら三ぺんだけ弾いてやるからすんだら、さっさと帰るんだぞ。」

ゴーシュはセロを取りあげて、ボロンボロンと糸を合わせて弾きました。するとかっこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなんでないんです」

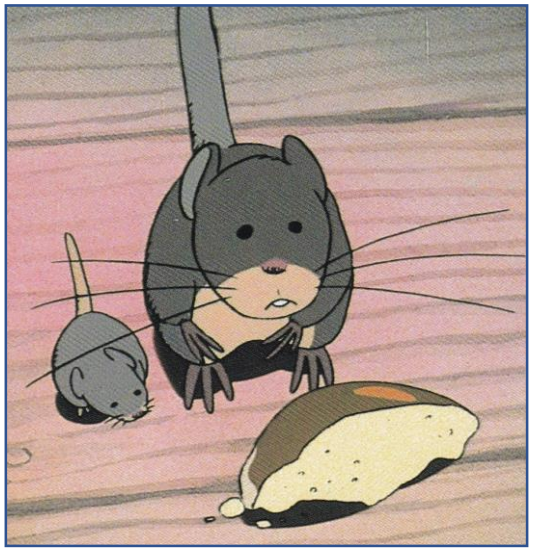
動物たちの訪問③狸の子



「ぼくは小太鼓の係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いといわれたんだ。」
「どこにも小太鼓がないぢゃないか。」
「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。
「それでどうするんだ。」
「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください。」

◉狸の子の要望で「愉快な馬車屋」を弾き、狸の子もこれに合わせてセロをたたく。
◉ゴーシュは「これは面白いぞ」と思うが、狸の子からセロの二番目の音が「きたいに遅れるねえ」と指摘され「はっと」する。
◉ゴーシュはその指摘を素直に受け入れる。

動物たちの訪問④ねずみの母子



◉ネズミがいうには、セロの震動があんま代わりとなって体調がよくなるという。
◉ゴーシュは気分よく子ネズミを箱に押し込んで「なんとかラプソディ」を聞かせ、おみやげにパンまでもたせて帰す。

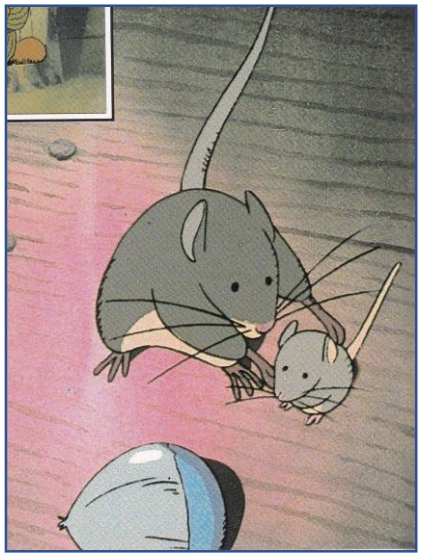
「何だと、ぼくがセロを弾けばみみづくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは、眼を片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここらのものは病気になるとみんな先生のおうちの床下にはいって療すのでございます。」

「すると療るのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって、大変いい気持ちですぐ治る方もあれば、うちへ帰ってから治る方もあります。」

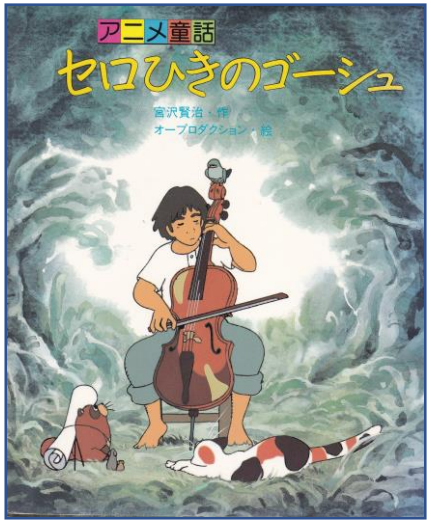


ゴーシュに欠けていたものとは

◉ゴーシュは、セロを弾くことによって生計を立てているプロである。
◉プロとしての技術は完ぺきではないが、ひたすら練習によって技術を磨けば、楽長や仲間を見返すようになると信じ込んでいる。
◉ゴーシュの名前はフランス語から来ているといわれている。「不自然な」とか「ゆがんだ」という意味である。

◉何がいったい「不自然」で、どういう風に「ゆがんだ」というのか。
◉読者が気づくのは、ゴーシュの独りよがりの強さである。
◉つまり、自分の技術の上達のことしか眼中にない、その狭いかたくなな考えである。

音楽は生命と生命とを共鳴させる



●本当の音楽とは何か？　それは技術でもないし、自己満足でもない。

●ゴーシュは動物たちによって、単に弦の乱れや、正しいドレミファや、練習のきびしさや、音楽の感情・効用などを教えられただけではない。

●ことは音楽以前の、もっとも基本的な人間的な問題に関わるといってもよい。

●ゴーシュは猫との関わりによって、音楽とは聴き手と共有するものだということを知る。

●また、鳥との関わりによって、ドレミファ、つまり音というものは「生きる」ことに直結したものだということを悟る。

●狸の子との関わりによって、音楽をともに奏でる喜びを知る。

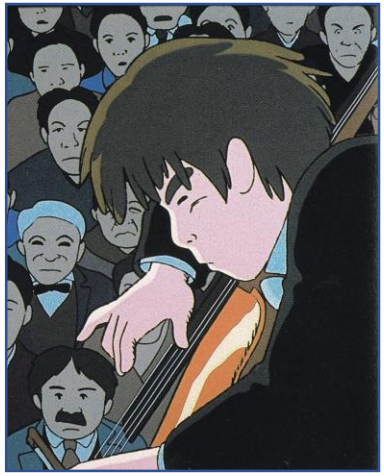
●ねずみの母子との関わりによって、音楽が聴き手に大きな影響を与えること、そして音楽を通して生命と生命とが共鳴しあうことを知る。

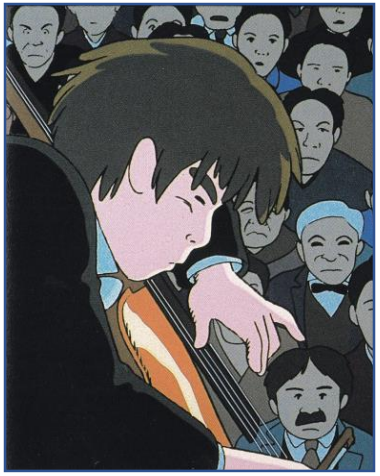
互いに他と呼応しながら

◉ゴーシュは、自分の狭い考えにこだわっていたが、動物たちとの交流を通して、次第に素直になっていく。
◉自分のことだけ考える傾向が、交流によって視野が開かれ、自分と対峙するものたちを眺めるゆとりが生まれた。
◉音楽が閉ざされた心に通路を開く。それは生きとし生けるものとの〝共生〟の世界への通路だ。

◉この成長を可能にする装置が、動物たちとの交流であることはいうまでもない。
◉〝共生〟とは、まずオーケストラのシステムを動かす重要なポイントである。
◉オーケストラは、それぞれのパートが互いに他と呼応しながらハーモニーをつくり出していく。
◉さまざまな個性が一つに溶けあうそのハーモニーは、さらに聴衆たちと溶け合うことにより一つの芸術に昇華されていくのだ。

次第に心が開いてくる





◉ゴーシュの「自分が第一＝慢」は現代人一般の心の病である。人間にとりつく宿業である。

◉現代人は、知らず知らずのうちに自分の殻に閉じこもってしまう。

◉他との競争に負けまいと、自分を強くするためには、どんな努力も惜しまない。

◉そして、そんな自分だけが大切と思う。

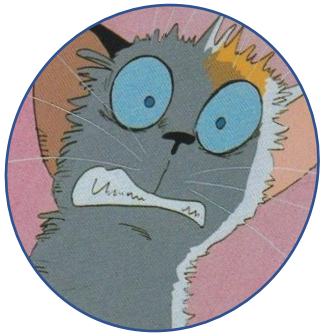
◉「セロ弾きのゴーシュ」という作品は、〈私心を去れ〉〈自己満足に陥るな〉といった人間性への警告を発している。

◉つまり、音楽がかたくななな心を開いてくれることを示している。

◉ゴーシュは動物たちとの交流で、大自然の生命リズムに感応して、芸術の本質に開眼する。

◉しかし、それは頭脳で得た知識ではなく、心身にしみ込んだ悟りなので、自覚意識は少ない。

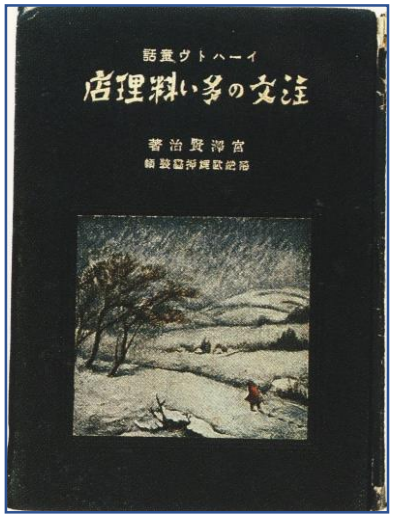
◉頭で考えるのではなく、ゴーシュの生命そのものが感応しているのである。



第2章

賢治と音楽と

賢治の３７歳の人生



童話集『注文の多い料理店』

『心象スケッチ　春と修羅』

宮沢賢治　1896(明治29)-1933(昭和8)

■花巻の商家に生れ、幼少時から自然に興味を示し、盛岡高等農林(現・岩手大学)在学中に同人誌を創刊し、自らの想いを文芸という形で表現する。

■卒業後の進路をめぐって父と対立し、家出上京する。この間に童話を量産する。

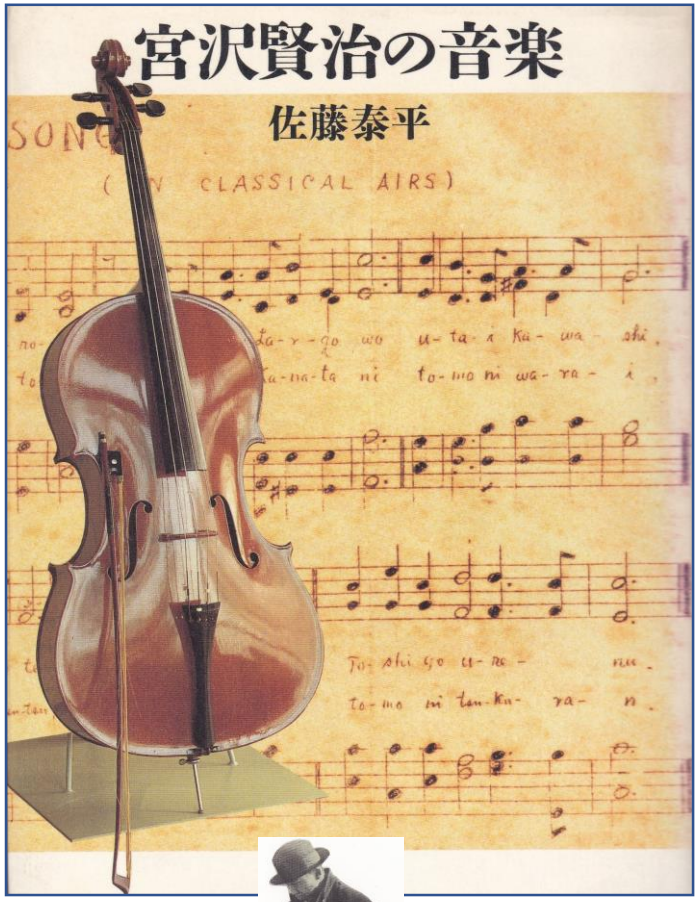
■帰郷後に花巻農学校の教諭となり、詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』を出版する。

■四年で退職し、農民に対する深い愛情を農事指導の形で実践したが、胸の病に苦しみ、三十七歳の若さで逝く。

■代表作「銀河鉄道の夜」「どんぐりと山猫」「やまなし」など。

賢治と作詞・作曲

◉賢治の童話は百篇を超える。そして、その三分の一に歌が入っている。
◉人間もふくめた自然の中に存在するものたちの訴えやつぶやきを、そのまま伝えたいと思ったその瞬間に歌ができあがった。
◉そのものたちとの交流の中で、そのものたちの心が動いたときのもっとも表現しやすい方法の一つが歌だったのだろう。



◉賢治の作詞・作曲の歌は8篇ある。「星めぐりの歌」「月夜のでんしんばしら」「イギリス海岸の歌」「牧歌」などである。
◉ある人(永瀬清子)はこういう。
◉「彼は、詩が紙に書かれない以前まだもやもやの星雲状態であるときに、すでにリズムある言葉でもってものを見たり感じたりした人であるにちがいない」「彼の生理そのものの中に音楽がとけこんでいたにちがいない」「賢治はどう考えても絶えず音楽を胸に奏でていた所の詩人である」。

妹トシから受けた影響

◉2歳下のトシは小学校では6年間ずっと「全甲」を通すほど優秀であり、岩手県立花巻高等女学校でも主席となる。

◉音楽への関心が強くあり、すでに三学年級会でオルガン独奏もしていたトシは、四年次には音楽教師からバイオリンの個人教授を受けるなどさらに音楽熱を高める。

◉賢治が盛岡高等農林学校に入った年に、2歳下のトシは東京目白の日本女子大学校に入る。

賢治5歳　トシ3歳

◉トシは創設者でクリスチャンでもあった成瀬仁蔵の思想に共感し、休みで帰省したときには賢治や弟妹たちに讃美歌を教え、みんなで合唱した。

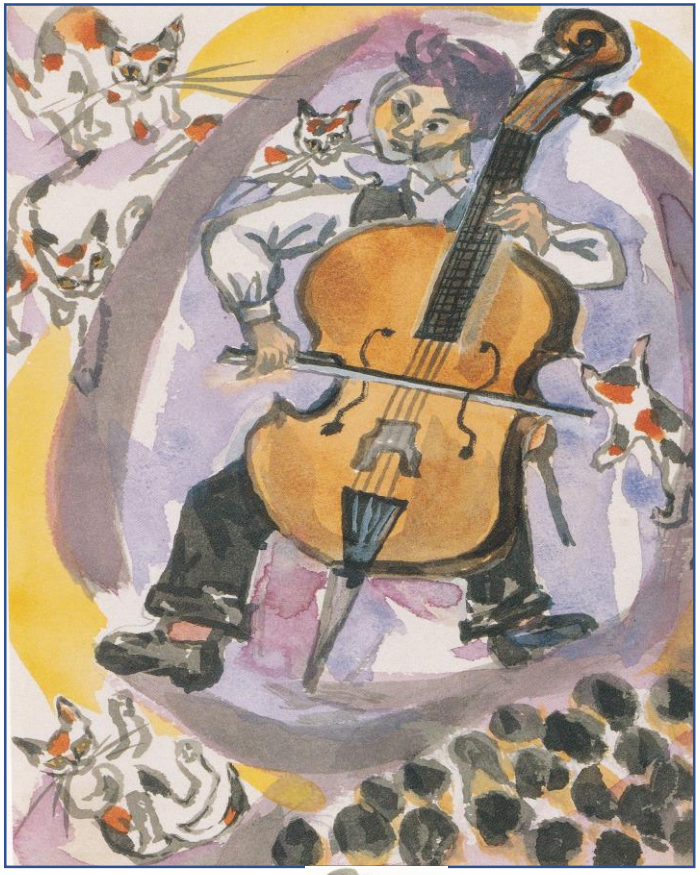
◉トシは在学中に肺炎のため入院、急ぎ上京した賢治の看護を受ける。

◉のち回復により母校花巻高等女学校教諭心得となり、英語・家事を担当するが、また病状が悪化して24歳で結核のため亡くなる。

◉「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」を亡くした賢治は「永訣の朝」などの詩を残す。

賢治はトシ経由で成瀬を知る

◉トシは兄に東京の女子大から一週間に必ず一度の消息をよこしていた。
◉そこには成瀬仁蔵やタゴールというトシが感銘を受けた思想家の世界観が記されていた。
◉賢治は彼らから感化を受けたトシの信仰、すなわち既成の宗教の形を超えてより根源的な宇宙のいのちと触れることで自己と宇宙との正しい関係を求める姿勢を、トシの遺志として受け継ぐ決意をした。



◉賢治が農学校をやめて始めた羅須地人協会は、成瀬の「帰一協会」に通じるものであった。
◉「帰一」とは〝自己と宇宙との正しい関係〟を指したもの、つまり種々異なった特色をもつところの、多数が「宇宙」の意志のもとに調和し、一つに溶けあうという意味の言葉である。
◉これを音楽にたとえれば、さまざまな個性をもつ音色が集まって、一つのコンサート・ミュージックをつくりあげるのにも通じる。

タゴールから受け継いだ音楽観

◉トシは１９１６年7月にインドの詩人タゴールが成瀬の招きに応じて女子大の講堂で行った自作詩「ギタンジャリー」の朗読を聞いている。
◉タゴールは、賢治の童話集の広告ちらし文中に彼の詩集『新月』に記された地名「テパーンター ル砂漠」として登場する。
◉タゴールはいう。
◉「私たちの個人の心は、この宇宙の心の律動的な振動をとらえ、空間と時間の音楽として応答する弦である。私たちの心の弦の質と数と音度は異なっており、その調べはまだ完成の域には達していないが、その法は宇宙の心の法である」。
◉「ある弦が他の弦と同調して振動するのに気づいたとき、この共鳴が自らの内に永遠なる実在を体現していることを知る。世界が共鳴によって私たちの想像力を奮い立たせるという事実は、この創造的な想像力が、私たちと存在の核心との両方における、共通の真実であることを告げる」。
◉つまり、音楽で一番大切なのは、「同調して振動する」ことであり、一人だけうまくやっても音楽にはならないということである。

賢治とセロ(チェロ)

◉賢治は昭和元年３月、29歳のときに花巻農学校退職、農民になりきろうと４月から下根子に独居自炊の生活を始める。
◉この年に大枚１７０円を投じて鈴木正のセロを購入、５月からレコードコンサート、楽器の練習会を開く。賢治はオルガン、セロ担当。
◉８月、羅須地人協会設立。１２月、セロをもって上京、三日間セロの特訓を受けている。
◉嫁をもらえといわれた賢治がセロを鳴らして、これが自分の妻だと答えたというエピソード

セロ
賢治愛用のセロ。鈴木バイオリン製。大正十三年の価格表によれば、百七十円で、高価なもの。賢治は、三十歳にして独学でセロを始めた。昭和元年十二月にこのセロを持って上京。新交響楽協会の大津三郎にセロの特訓を三日間受ける。このとき、オルガンの個人教授も受けた。賢治は、音楽を文学および農民芸術の根底に必要なものと考えていた。童話『セロ弾きのゴーシュ』は、賢治の実感としても読める。（T・Y）

賢治の愛用したバイオリン

が残されている。
◉音楽への関心は高く、早くから洋楽のレコード蒐集につとめ、音楽教師の藤原嘉藤治を知るに及んでますます高まった。
◉賢治は何回か、浅草オペラを観た。そして、生徒たちを指導して自作の劇・童話のオペラ化を試み、勤務校(花巻農学校)で実演している。
◉賢治のセロは、花巻市の宮沢賢治記念館に展示保存されている。

オーケストラと音楽芸術

誰人もみな芸術家たる感受をなせ
個性の優れる方面に於て
各々止むなき表現をなせ
（略）
ここには多くの解放された天才がある
個性の異る幾億の天才も併び立つべく
斯て地面も天となる　―「農民芸術概論綱要」

◉成瀬の「帰一」思想は、たとえば音楽において、種々異なった音色が相調和し、共鳴して、一つのコンサート・ミュージックになるような奇蹟を孕んでいる。

◉もし音楽に一つのちがう音質も、ちがう音度もなくて、すべて同じ性質の音だけであったならば、音楽は決して成立しない。

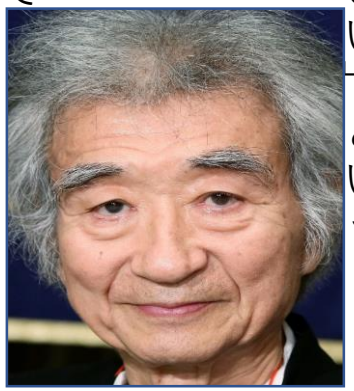
◉それぞれにちがう個性あふれる音が調和するところに、はじめて音楽ができる。

◉賢治はオーケストラが好きであった。

◉それは、たくさんの個性(生命)が宇宙意志のもとに一つに調和するその不思議なリズム(音楽)に魅せられたからと思われる。

オーケストラと小澤征爾

●本年2月6日に小澤征爾さんが88歳で亡くなられた。
●1973年からボストン交響楽団の音楽監督を29年間務め、〝世界の小澤〟とたたえられた。
●小澤さんの口癖は「うまく指揮してはダメ。同じ一つの呼吸を共感できるかが大切だ」ということだった。
●団員に聞くと「まとめる力がすごい」という。
●あるトロンボーン奏者は「譜面を見るな、ぼくを見ろ」っていうんだと涙ぐむ。また、オーケストラをわしづかみにするような力があった、弾いているというか、自然と弾かされているという感じ、生きているっていうのが伝わってくると、口々にいう。



●小澤さんの名言――「個というのが薄くなってきた。みんなが決めたことに従っていれば安心という風潮が広まってきた」「ぼくは一人一人の個性を引き出したい。それをまとめていくと一つの音楽に仕上がる」「個というのは心なんだ」「ばらばらのものを一つに集め、まとめるのがオーケストラの仕事」「オーケストラは何よりもコミュニケーションが大切だ」。

音楽を科学が解明する

◉音楽にはスーパーパワーが潜んでいることを科学が立証した。

◉音楽は、脳の生命活動を司るRS(リワード・システム＝報酬系)というネットワークを刺激する。

◉生命活動とは生に必要な〈食べる〉〈眠る〉〈交配／交流する〉などという基本行動である。

⬇賢治が愛用したものと同年代の蓄音機。賢治はクラシック音楽のレコードを多数収集していた。田舎で余りに多くのレコードが売れたため、賢治愛顧の店はレコード会社から表彰されたという。

写真／北條文雄

◉〈交配〉は生殖による生命誕生の喜びであるが、人の場合は〈性欲〉だけを意味せず、人と人との〝交流〟を求める欲求といってもよい。

◉よい音楽を聴くと、脳内のドーパミン分泌量が増加する。

◉これが人を行動に駆り立て、その意欲を強めている。つまり、「元気」や「やる気」を感じさせるのである。

◉音楽は人(生命)と人(生命)とを結びつける。

◉私たちが他人との結びつきを感じる場所には、必ず音楽がある。

◉音楽のもっとも力強い要素はリズムである。

◉乳児が母親と添い寝をするとき、心臓の鼓動(リズム)が自然と母親の鼓動(リズム)と重なりあうという報告がある。

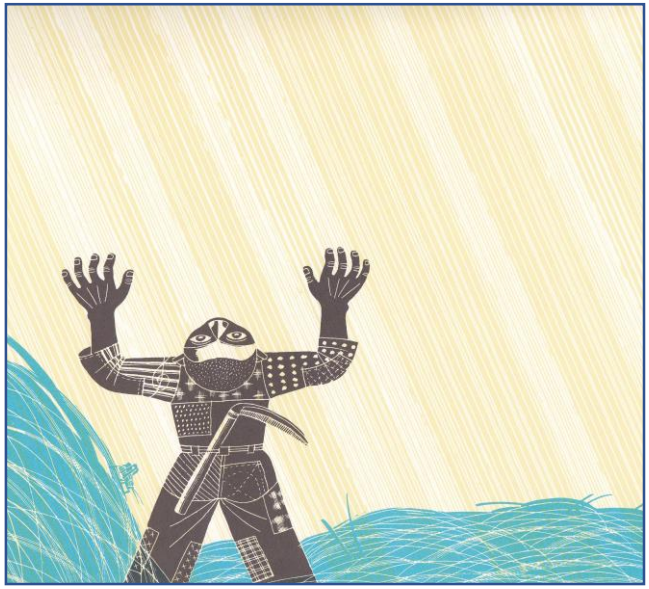
◉音楽が生命と生命を結びつけるのは、それぞれの生命に宇宙(自然)と直結したダイナモ(発動機)が与えられているからである。

宇宙に充満する生命リズム

●生命はリズム(音楽)をもっている。
●それは宇宙のリズムと調和している。
●妹トシは「自己と宇宙との正しい関係を得る道を求め」たい、信仰とは「自己の本質と宇宙の本質との関係である」と信じた。
●賢治もその遺志を受け継ぎ、「ことのちから＝宇宙意志」を自らの内と外とに感じて生きた。

ほんとうに空のところどころマイナスの太陽ともいうように暗く藍や黄金や緑や灰いろに光り空から陥ちこんだようになり誰もたたかないのにちからいっぱい鳴っている、百千のその天の太鼓は鳴っていながら少しも鳴っていなかったのです。

―「インドラの網」



●人は一つの生命として宇宙の中に生存し、生を営んでいる。
●このとき私たちの内にも外にも宇宙生成の原理が働いている。
●この正体不明であるが、〝私〟という存在に強く働きかけてくるもの、すなわち無意識的なものも身体を通して感じている。
●それは宇宙のリズムであり、生命のリズムであるが、これこそが音楽の基礎になるものである。

賢治の〝心象スケッチ〟

滝沢村　小岩井農場　撮影／松田司郎

◉賢治は、手帳とペンシルをもって野山に出かけた。

◉そして歩行しながら、そこここにあふれる植物や動物や虫たちが奏でる、不思議なリズムを感受した。

◉それは、歩行する賢治自身の生命が奏でる心のリズムと共鳴した。

◉その目に見えない生命音楽を写しとるときに、賢治の詩や童話はできあがったといってもよい。

◉賢治はこれを「心象スケッチ」と名づけた。

◉「心象／心像」とは心に映る映像だが、それは音楽であふれている。

◉賢治の作品が、私たちの感官にじかに訴えかけてくるのは、このためである。

本日は

これにて

おしまい

です

八幡平市松川渓谷　撮影／松田司郎